



3年生時の学年写真
右端が担任の遮那芳江先生。戦時中であり、先生もモンペ姿であった。前列右から3人目が飯村弘。

月刊

A c a n t h u s

(土浦一高・土浦中学とその周辺の物語)

第121号

平成31年3月12日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

戦時下の小学生2 ～筑波国民学校～

1941(昭和16)年4月1日、「国民学校令(勅令第148号)」が施行され、従来の小学校が改組されて、国民学校が発足しました。高5回の飯村弘(本校旧職員)の学年は、国民学校最初の入学生であり、最後の卒業生でもあります。筑波国民学校での戦時中の生活を伺いました。
文中の【 】内は筆者による注記です。

国民学校入学・戦時下での日々

1941年の4月6日に、筑波国民学校【1947年から筑波町立筑波小学校、1988年からつくば市立筑波小学校、2018年からはつくば市立秀峰筑波義務教育学校】に入学し、4月1日に発足した国民学校最初の入学生となりました。1学年1クラス、60人近く居たと思います。3年生からは、男女別の2クラスになりました。用務員さんを含め、先生は、10人くらいだったと思います。

学校には立派な奉安殿があつて、登下校の際には、必ず最敬礼をさせられました。また、「修身」の授業では、教育勅語を暗唱させられました。低学年では何のこともよく分からず、暗唱などとてもできません。四大節【訓】の儀式の時には、モーニング姿に白手袋の教頭が、奉安殿から教育勅語を奉戴して来て、同じく礼服姿の校長が、朝礼台の上でそれを厳かに読み上げ、私たちは、頭を下げて聞いていました。

12月8日、太平洋戦争が始まった時には、猩紅熱で長期間休んでいましたので、学校の様子は分かりませんが、母親とお針子さんたちとの話から、開戦を知りました。母親は、裁縫所を開いていて、近隣の娘さんたち12、13人が、習いに来ていました。開戦を聞いて、子供心にも、「大人になったら、兵隊になって戦いに行き、死ぬかもしれない。」と密かな恐れを抱いたのを覚えています。

戦争は始まりましたが、3年生の1943年頃までは、授業をはじめとして、通常の学校生活で、徒歩で行ける範囲でしたが、遠足も実施されていました。しかし、召集を受け、出征する兵士が次第に多く



真壁国民学校の奉安殿

桜川市真壁町古城に現存している。

なりました。その日になると、親族をはじめ、近所の人々・子供たち、白い割烹着を着た大日本婦人会の人たち、議員などの有力者ら、合わせて50、100人が、出征兵士の家の前に集まりました。有力者の激励の言葉と出征兵士の挨拶とが終わると、青年団の楽隊を先頭にして、軍歌を歌いながら、筑波線【土浦から岩瀬までを結んでいたローカル私鉄で、1914(大正3)年開業、1987(昭和62)年に廃止された。線路跡は、「つくばリントリーロード」となっている。】の筑波駅まで行進し、万歳を三唱して兵士を送り出しました。

農村地帯でしたので、さほどひどい思いはしませんでした。1944年頃からは、すいとん、蒸かし芋・ジャガイモなどの代用食が多くなり、果物は、戦地に送られたのでしょうか、全く手に入らなくなりました。ミカンやリンゴなどが貴重品となり、せいぜい正月に家族1人に1個くらいしか食べられなくなりました。

援農・勤労奉仕

1944年に入ると、戦局が逼迫し、授業をカットしての作業が多くなってきました。全校生徒が、地域毎に上級生をリーダーにして、近隣の農家での手伝いや作業に出掛けました。

稲刈りや麦刈りは、小学生には難しいので、ジャガイモの収穫や苗代の害虫駆除をしました。苗の裏側に潜んでいる害虫を捕まえて、用意した袋に入れて学校に持って行くのですが、捕獲数が少ないと、先生から、「サボっていたんだろう!」と叱られました。

山には松の根っ子掘りに行きました。切り倒した松の根っ子をスコップや鶴嘴で掘り起こすのですが、小学生でも5・6年生になれば、一人前の大人と同じに見られていました。掘り起こした根っ子は、やはり学校に持って行きました。松根油を採るために、業者が回収に来ていたのです。養蚕の季節が終わると、桑の枝の刈り取りをしました。これも、業者が回収し、枝の皮を剥ぎ、水に浸して皮の繊維を取り出し、糸を作り、それで布地を作ったのです。学生服になって支給されましたが、全員には行き渡りませんでした。

地域単位でも動員が掛かり、母親と一緒に、作谷の陸軍西筑波飛行場での土木作業に駆り出されました。小学校の教員をしていた父親が、単身赴任中だったので、母親と私が呼び出されたのです。作業は、滑走路の整備のようなことでしたが、休憩時間に林の中に駐めてあった飛行機を見に行ったら、兵士から、「近付くな!」と叱られました。よく見ると、ベニヤ板製の模型で、四機として置いて

あったものでした。小学生ながら、これで勝てるのかな、と疑問に思いました。

1944年の末頃から、陸軍の兵隊が、学校に駐留するようになり、2教室を接収して使っていました。隊長は、近隣の有力者の家から騎馬で通って来ました。兵隊と言っても、貧相な身なりで、大した武器も持っていないませんでした。何をしているのかよく分かりませんでした。何をして「桜花」などの本土決戦用の兵器を格納するトンネル工事を、筑波山周辺で行っていたのかもしれない。筑波山への道路脇の崖には、幾つかの弾薬庫が掘られていて、これの警備には、町の青年団が当たっていました。

軍隊でも、食料の補給が滞るようになったのか、そのうち、校庭を耕してジャガイモを作るようになりました。そのため、私たちは体育の授業ができなくなり、先生に文句を言いましたが、先生は、「敵が上陸したら、兵隊さんがみんなを守ってくれるのだから、感謝しなくてはいけない。」と言われました。武器も満足に持っていないのに、どうやって敵を遣っ付けるのだろうか、と誰もが思っていました。

空襲

太平洋戦争が始まると、国民学校でも軍事教練が実施されるようになりました。家で作った竹槍を持って行き、敵に見立てた巻き藁を突く「刺突訓練」をしました。空襲が始まった1944年末からは、空襲に備えての訓練もしました。空襲を受けた時には、地面に、できれば窪地に伏せて、両手の親指で耳を、小指で鼻を、残りの指で目を抑えているように、と教えられました。

米軍機は、筑波山を目標に飛来し、作谷の陸軍西筑波飛行場や笠間の筑波海軍航空隊などの軍の施設及び筑波山頂にあった気象庁の測候所を攻撃したようです。時には、上空で日本機との空中戦も行われていました。撃墜された飛行機からパイロットがパラシュートで脱出すると、見に行こうと走り出しましたが、いつも途中で諦めていました。見た目よりずっと離れていたのです。

1945年6月頃からは、空襲警報が頻繁に発せられるようになりました。授業中に空襲警報が鳴ると、直ぐに帰宅させられました。沼田の自宅まで普段の通学路を通ると、目立って狙われる、というので、山道を辿って帰りました。山道には藪や切り株が多く、下駄や草鞋履きの足には切り傷が絶えませんでした。革靴は勿論、ズック靴も、配給制となり、なかなか手に入らなくなりました。怪我すると、血止めになるという野草を採って、傷の手当てをしていました。朝から空襲警報が発令されると、登校せずに、指定された家に近所の子供たちが集まり、高学年の児童を中心にして、自習をしていました。近所の子供同士で班が作られていて、援農や奉仕作業も、この班を単位にして行われました。私の班は、5年生だった私がリーダーで、私の家で自習をしていました。時々先生が巡回して来ましたが、まだ小学生、みんな勉強などせずに遊んでいました。

麦が色付いていましたので、6月だったと思いますが、母親と2人、麦畑で農作業をしていた時に、米軍の艦載機に狙われました。艦載機が2人を目掛けて突っ込んで来た時には、生きた気がしませんでした。脅かすだけだったのか、機銃

掃射はされませんでした。乾いた、その爆音が、未だに耳に残っています。(注2)

終戦

1945年の4月には、担任の先生が、応召・出征されましたので、クラスのみんなで餞別を差し上げました。しかし、8月15日に終戦となり、先生は、無事復員し、復職されました。嬉しく思いながらも、私たちは、先生には聞こえない所で、「餞別返せ！」と言っていました。

8月15日の終戦の日は、夏休みでしたので、家で玉音放送を聞きました。同じ班の子供たちと一緒にでしたが、私たちには何のことも理解できず、大人たちの会話から、戦争に負けたことが何となく分かりました。

9月の授業は、教科書の墨塗りから始まりました。全ての教科書が墨で塗られ、「修身」の教科書などは、殆ど真っ黒になりました。進駐軍が学校にも来るということで、模擬銃や模擬手榴弾などの軍用品をはじめ、軍国主義と見做される物は、何でも学校裏の池の中へ廃棄させられました。こんな田舎にまで進駐軍は来ないだろう、と思っていました。間もなくやって来ました。先生方は、だいぶ心配をして、緊張していたようですが、子供たちは無邪気なもので、進駐軍の兵士たちとキャッチボールをして遊んでいました。

国民学校卒業・新制中学校入学

1947年3月に、教育基本法と学校教育法とが制定・公布されました。学制改革(6・3制の実施)により、4月1日に、国民学校は廃止され、国民学校初等科が新制小学校に、国民学校高等科は新制中

学校に、それぞれ改組されましたので、1947年3月卒業の私たちが、国民学校最後の卒業生となりました。そのため、私たちは、小学校6年間で国民学校で過ごした、唯一の学年となりました。

新制筑波中学校では、筑波国民学校の高等科の教室や陸軍の兵隊が接収していたそれを使って、授業が行われました。国民学校6年を卒業した私たちが、中学1年に、高等科1年生だった者が中学2年に、2年生だった者が3年になりました。ですから、校舎も生徒たちも変わらず【戦争中の個人疎開や戦後の引き揚げなどで、生徒数は急増していた】国民学校の延長のような感じで、新制中学校生活が始まりました。

旧制度の祭日

旧制度の祭日。昭和2年制定。四方拝(1月1日・紀元節)2月11日・天長節(4月29日・明治節)11月3日(の総称。明治時代の天長節は11月3日、大正時代は10月31日)。

空襲体験

高8回青山和義(本校第25代校長も、機銃掃射を受け、その体験を次のように語っている)。

「私は、東京都葛飾区金町で生まれ、昭和19年に国民学校に入学。1学期までそこで過ごしましたが、空襲を受けるようになり、父の実家である土浦市内の大岩田に疎開して、大岩田国民学校に転校しました。大岩田は、農村地帯でしたが、海軍航空隊や海軍航空廠などの軍事施設があった阿見町に隣接していましたので、空襲による被害を受けました。

阿見町の軍事施設が爆撃された日のこと。飛行機が去って1時間ほど過ぎましたので、近所の人3、4人で、田んぼの中にある畑へ野菜を採りに行きました。すると、突然、グラマン戦闘機が1機現れ、機銃掃射しながら急降下して、我々の方へ向かって来ました。咄嗟に身を伏して、難を逃れました。また別の日には、家の田んぼに爆弾が投下され、その時は防空壕の中にいましたが、入口の扉が、爆風でガタガタと震動し、防空壕が崩れるのではないかと不安になりました。夢の中に繰り返し出てくる。忘れられない出来事です。」